

1976 ザンスカールの話

——限りなく天国に近い人々——

渡部 里美

もう出発してから三時間は歩いているだろうか。きのうから幾度となく川の徒床をし続け、やや疲れきみの体。歩くペースはポーター次第だ。

ワンピッチ三時間は驚異的であらう。

午後二時、やっと昼食のための休けいだ。彼らの休みは長い。充分、二時間はあるだろうか。昼食はまきかわりの牛糞を拾い集めることから始まる。牛糞はいたるところに、それこそ、牛の糞ほどある。彼らはいとも簡単に火をつけるが、このような地で文明人とは、はかないもので、私達にはとんと技能を得ない。聞いてはいたが、糞がこんなに燃えるとは思わなかった。

広い谷間の川原で休む。直射日光は焚いままに強烈だ。昼寝をとることなどできそうにもない。

ここは、ザンスカールの入口。カルギル側から続いてきた道はベンジ・ラを越えて、ザンスカール川の谷に入った。ボックスと呼ばれる所だ。話によるとこの辺は、牧場のようにすばらしい所だという。見ると聞くとは大違い。でも牛はいるようだ。ミルクもあるようだ。ポーターの一人シリング、ルップ君は私達のボリタンに沢山のヨーグルト（ジョーと云う）を持って来てくれた。

ポーターは二人いる。一人はカルギルに近い回教圏のパニカーから雇っていたバククル氏、もう一人はラマ教圏最西端ラムドン・ゴンバの西10kmほどにあったジュルドの村から雇った、前出のシリングルップ君である。宗教も人種も違いの彼らはよく話す。両方とも互いの言葉を少しづ

つ知っているらしい。

私達がバククルにあいさつする時は「アッサラムアライグン」、シリングルップ君には「ジュレー」と言う。彼らが私達を呼ぶには「ハロー」から始まる。「チャット・チャット」と言うべき言葉も「ハロー」だ。

シリングルップ君がヨーグルトを持って来たときも「ハロー」と言って持って来た。始めはミルクかと思っていたが、彼が「クッシー」と言ったのでヨーグルトだと分った。クッシーとはヒンドゥ語でヨーグルトのことだ。ちなみに、ラダック語では「ジョー」と言い、タルドー語では「ダビ」と言う。他に「カード」と言う呼び方もある。ある人に言わせると少しずつ違いがあって全てが、ヨーグルトのことではないとも言う。

彼が持って来てくれたヨーグルトは乾いた私達ののどに快いすばさを残してくれた。どこから買ったのかと聞くと、シリングルップは「アボ」と言って指さした。そこにはチャット見た日には分らないような石積みの家があった。それは、夏期に放牧の為にだけ使う仮の宿であった。しばらくするとその家から、5～6人の女子供が私達を見つけて走ってきた。私達がザンスカールに入って会う初めてのラダック人だ。

その人々は純粋なラダック人と言える人々だった。成人した女は男良仕事中大というのにベラック（トルコ石をちりばめた、ラダック特有の髪飾り）をつけ、羊の皮でできたロクバー（背あて）

をしている。子供はディビと呼ばれる帽子をかぶっている。確かにレーで見たラダックの人とは違っていた。レーの町で見るラダック人は女はチュバ(チベット風着物で都会でのニューファッションと言える)が多く、ベラックは祭の時だけ。近くの村から来る人々は多くは男女ともカントッピ(俗に言うラダック帽)を着ているのだ。彼らはむしろ都会の元ラダック人で純粋とは言いがたい。

私は純粋のラダック人の生活に会いに来たのだ。そして、今、ボックスで会うことができた。その彼らを前にして、私は何のためにここへ来ているのか、何故この計画を行っているのか考えていた……。

— M I C H I を求めて —

そのことを書くことは、後から入部して来た君達にとって少なからず探検を考えるのに役立つであろうと考えたからである。そして私の反省をもこめて。

その1 コロラドと日本横断をへて

探検部に入部した1971年春以来、私は川を下ることを至上として活動してきた。その成果は1973年のコロラド河遠征と翌年の日本横断航行であった。

そのころの私の目には、川下りのことだけが映り、自分自身、川下りのスペシャリストたらしとして行動していた。そのころが愚かだったとは今も決して思っていない。そして間違いだとも思っていない。

コロラドにも日本横断にもあきたらず、私は次の目標を作っていた。それが、一つには大学90周年企画の探検部案として候補の一つとなった「

青ナイル」であり、そしてインド・ラダック・ザンスカールの引き金となった「インダス河」であった。

その2 嗚呼ノ友よノ裏切りの河を見よノ

すでに大学五年目に突入していた私は、1975年にインダス河の偵察をかね、「カシミール・インダス遠征隊」として藤本・大嶋の二人と共にラダックに向った。

ボンベイからニューデリーに着いた私達はそこでマグニチュード8に値するショックを感じた。ドイツ人とインド軍の合同隊によって、一週間前にインダス河が下られたと言うのだ。何の為に私達はインドに来たのか。インドの貧困なる人々に会うためか? 否。だれも下っていないインダスの流れを知るため、そして将来、それを下るためではなかったか。しかし、その川は下られてしまった。

その3 華麗なるメタモルフォーゼ

いや、ひょっとしたらもっと面白いものがあるかもしれない。その地は、一年前に解禁されたばかりじゃないか。気をとり直して、私達三人は予定通り、ラダックに向った。

ラダックはインド北西部ジャム・カシミール州に属し、一応行政的には、インドの一部である。しかし文化的にはむしろチベットに近い。インド統治以前はほとんどチベットの一部として理解されていたところである。広義におけるラダックは中国国境から今はパキスタンの一部であるスカルドゥやレーの南のザンスカール地方や北のヌブラ地方まで入るらしいが、狭義におけるラダックはレー周辺だけをさすらしい。



レーの町は昔、ラサ(ナベト)からフンボ河添いにガルトクを通りインダス河に添ってカルギル(パキスタン領)をへてアフガニスタンへぬける二次的シルクロードと天山南北路(シルクロード本流)からカラコルム峠を越えインドに至る道の十字路として重要であった。人種はモンゴリアンが多く、あるいはそれとの雑種であると考えられる。そして文化における、接点であるために興味深い地域だと考えられた。

私達を迎えてくれたものは、4000mの山岳道路と月世界のような荒涼とした土地、そしてその中に忽然と現れるゴンバ(ラマ教寺院)。この厳しい自然の中にラマ教を信じて生きている人々。そして古き昔、二次的シルクロードのおきみやげ、異文化と異種族。

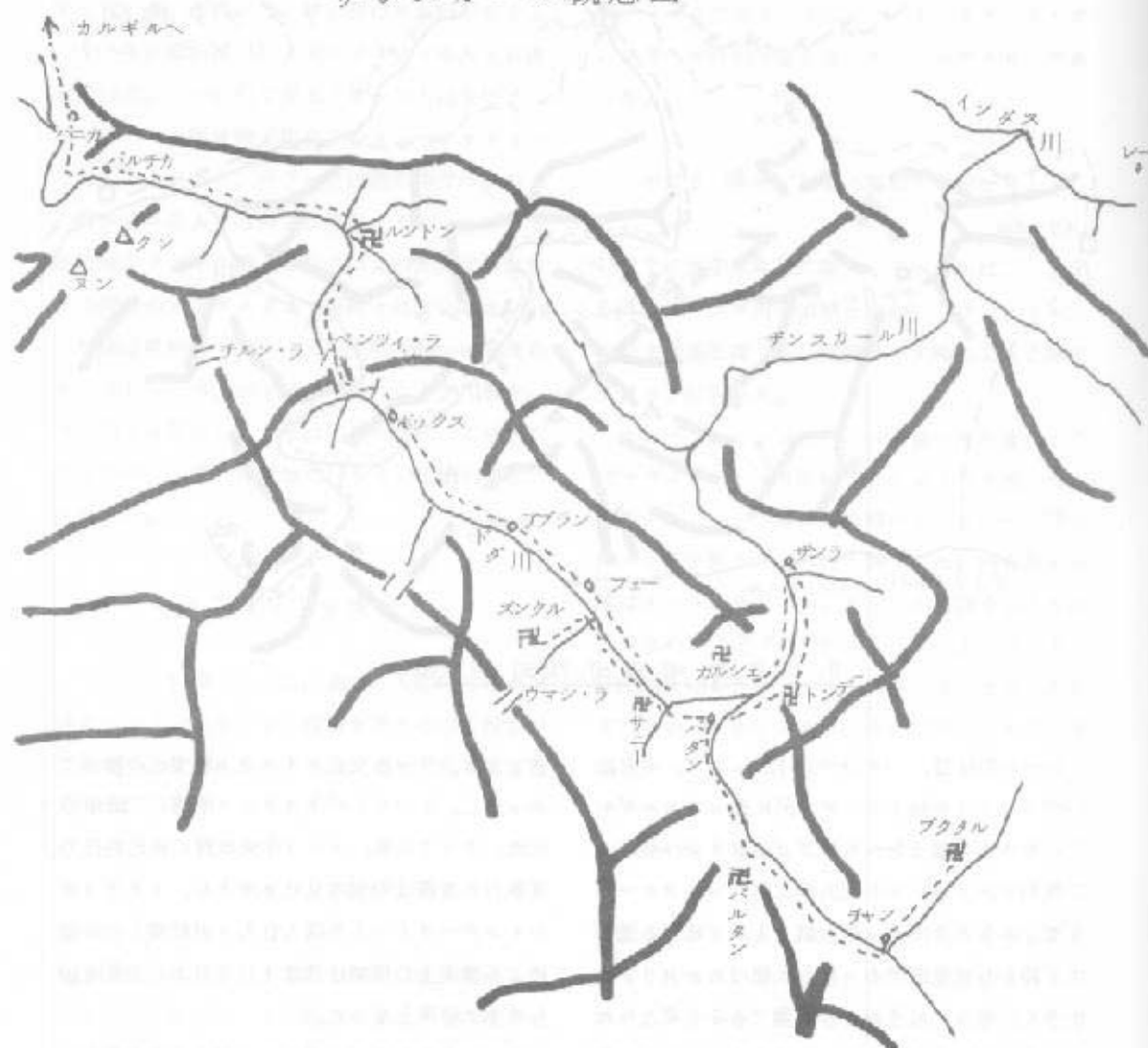
レーの町にあったものは5つの宗教と5つの言葉、3つの文化と大別して3つの種族。この地は

古くから、ラマ教文化とイスラム教文化の接点であったし、インド・パキスタン・中国の三国争点の地となって以来、インド中央政府の政治的圧力、軍事力の重備は中央の文化を注入し、1974年のインナーライン(外国人立入り規制線)の後退による事実上の解禁は西洋そして日本の文化を彼らに示す結果となった。

そしてそれがラダック(レー周辺)にもたらした文化変容は興味深いまでだった。また、そこに見える峰の向こうには、道がついていても私達外国人には行けないと、そこにはまだ純粋のラダック文化や異文化があること、そして解禁までもないため、可能であるがまだ足を踏み入れた外人はいないこと。

それからのことは川しか知らなかった私をして未知への探求ならしめること、つまり調査活動へ足を向けるのに充分な要因であった。

ザンスカール概念図



おはよう。 こんにちは。 (あいさつ全般) ジュレー
 ごきげんいかがですか。 キョラン ギャラ ラガー 元気です。 シガ ギャラ イナ
 ビンから来たの。 カネ スキョット ビン どこへ行くの。 カル チャット
 あなたの名前は何ですか。 キョラン エ ミソガー ナー ゼルチェン
 私の名前はソナムです。 ニエ ミソガー ソナム ゼルチェン
 あなたはラマですか。 ニエラン ラマ イナー
 私は日本人です。 シガ ジャパンバ イノック こっちへ来い。 イル ヨン
 おなかがすいています。 シガ ストックサー ラグ
 わからない。 シガ ギュス ノット

その4 ザンスカールの道と未知

純粹のラダック文化が残っているのはレーの町の北、カルドゥン・ラ(ラは時の意)を越えたカラコルム山脈との間のスブラという地域と、レーの南、ストック山脈とヒマラヤ山脈の間のザンスカールと呼ばれる所だと聞いた。スブラは末ダイナーラインの外側であって私達は行けない。

その他にもラダック文化と異種のむしろチベットに近いチャンタンと言う所が中国との国境近くにあることや、ダ・ハヌーと呼ばれるヌーリストンや、カフォリストン、そしてフンザのような異民族の村がパキスタンとの国境の近くにあることを聞いた。しかし、とりあえず今年(1975年)と来年はザンスカールにしか入れないとのことであった。そしてその事実がザンスカール踏査隊を編成させることになったのだ。

その5(後) 1976本隊までに

1975年偵察隊の成果は、現地連絡本部の設置とラダック語単語集の収獲だった。そして私は現地の人々に来年も来ることを約束して帰って来た。帰国後、私は本隊の隊員をそろえるべく現役隊員にその地における計画を発表した。その計画も未熟のまま。その計画に参加の意志を表わしてくれたのは、偵察隊の二名と四年生倉谷さん、(現OG)と七名の一年生達だった。しかし、そ

の後ミーティングを繰り返すうちに計画への自信のなさか、あるいは経済事情からか、四名の一年生が脱落した。結局残ったメンバーは倉谷、藤本、大嶋、井上、高味、西川と私の七名になっていた。行ったミーティング30数回。これでもなお不足だったことは、出発前にゴタゴタしたことでも分りえよう。

食糧事情も思いだろりからとチャパディー(ヒマラヤ風小麦粉焼)だけの山行も行った。全てを想定して合宿しても4000mあるいは5000m近い高所への高度順応には不安が残った。去年は事実、一週間ほどの滞在中で初めの三日間は頭が痛く、町を歩くのさえ困難だったからだ。数ある不安材料は本隊の一カ月前までに先発を出し、その報告に基づいて行動することで解決を計った。事実それは、予期せぬ変動に対しても対処の余地を与えてくれた。

数々の問題を残しながらも私達は出発した。

—そして今、私達はインドにいる—

一年ぶりのレーは多数の外国人観光客を集めて、ブームにむせかえらんばかりだ。去年ヌーリスト・オフィサーだったディーンカーン氏は今はマンパワーディベロップメント・オフィサーとして、私達を公私にわたって快よく迎えてくれた。

彼の適切なアドバイスと親切なまでの配慮はありがたかった。

ある一人の隊員は、ザンスカール地域滞在中にタツずれの化癩により、足の甲と土踏まずを除いた足の裏側の大半の皮が2〜3回づつはがれるという苦痛を味わった。

しかしおかげで彼のおだやかな人間性も手伝ってエンジェル・カノウという名誉ある愛称を得た。

そして、彼のもっとも有力なトライはザンスカールへのアプローチルートについてだった。彼は私達の計画で不備な点を指摘した。そしてルートを変更するように注意した。初め私達の計画では、レー側からザンスカール河に添ってザンスカール盆地に入域する予定だった。しかし彼は、雪解けの増水がかなり多いこと、そして同ルートでスイス隊が失散し退却していることを説明し、カルギルからのルートを推薦した。

カルギルからベンジィ・ラを越えて入るルートは、当初の計画でのエスケープルートとして考えていたものであったので私達は安易になることを恐れ、拒んだ。しかし、レー側からのルートに機がないこと、そして通常、このルートは冬期の水のない時の現地の人々のルートであることを説明され、変更を余儀なくさせられたのである。

そして、ヌン・クン山の東側を通るチルン・ラ（峠）を越えスリナガル側のバハルガムへ向けるルートも雪が多く氷河が難関であるとの理由から変更した。そのかわりに彼は、ザンスカール内から東を通るマナリルートへのアプローチを考えてくれて、そのルートが非常に地域的に白紙状態であること、そして過去に外国人が通ってなかったことを説明し、私達のために特別許可を与えてくれ

るよう、州政府に話をしてくれた。

しかし、それは無駄に終わった。つまり、そのルート上で軍が直轄する所があること、そしてその許可がとれたとしても九月初めまで雪があり、途中の5200mの時は通過不可能であることがその理由であった。

計画はかなり縮小せざるを得なくなったが、政府にさからって実行することは無理であり、また意味のないことであるのも事実。

私はカルギルから入り、カルギルに出るというコースで実行に移すことにし、7月19日レーを出発したのだった。

—そして ベンジィ・ラを越えて—

そして、私達はザンスカール入域を果たした。ベンジィ・ラを越えて三日間、ポーター2人、ポニー2頭を従えてサニーという村の近くまで来ている。

先発隊二名のうち藤本は予定に従って帰国し、踏査を行っているのは六名。そのうち、大嶋と高味の二名はベンジィ・ラの手前で四名と別行動をとり、タシ・トングェ村近くのゴンポロンブク洞窟は今もろ落盤がひどく、奥まで入りにくい状態だ

柿谷会計事務所

税理士 柿谷 桂

事務所 〒543 大阪市天王寺区真法院町88番地
電話 大阪 (06) 772-0268
自宅 大阪市天王寺区真法院町88番地

ったと言う。

私達の踏査計画では六名の隊員が二名づつパーティを組み、三つの隊に分かれ別々の行動をとることにしていた。まず一隊は、先ほど記したように、祠堂調査とザンスカール城に入る前のラマ教文化圏とイスラム教文化圏の接点と目される、ラムドン・ゴンバの近くのジュルドウ村とダシ・トンデ村の調査。そして他の二隊は途中まで同じ行程で進み、サニー村手前で分かれ、一隊（私と西川）はサニー村へ、もう一隊（倉谷・井上）はズンクル・ゴンバ（ラマ教寺院）のある谷へ向った。

私と西川の二名はサニーの村でニュンネの祭と呼ばれる、野外での読経会を取材したあと、行政の中心地バドゥンに向い、行政や商業流通に関する調査を行った。

倉谷隊はバルシン（経典のもとになる版画板）が沢山あると言われているズンクル・ゴンバに向い、それらの調査とその近くの村での取材を行ったのである。

私達が別行動をするには二つの理由があった。それは一つには、地域が広く、ある程度全域をカバーするには、時間がないこと。もう一つは、少ない日数でも定着しなければ調査の意味がなくなることからであった。そして、重要なゴンバが存在していることもその理由だった。

この場で調査内容を詳しく述べるには紙面が少なすぎるので、ここでは、特筆すべき調査と、興味ある観点だけ述べるとしよう。

1. 祭に関すること

イ、ニュンネの祭（サニーにて） ロ、ナロバの祭（サニーにて）

2. 生活に関すること

イ、結婚式の全容（ナラビとゴジョにて）
ロ、死に関して（バドゥンにて）

ハ、農耕、牧畜、商業流通、建築物

3. 行政に関すること（バドゥンにて）

イ、行政単位と人口

ロ、学校やその他の政府の施設

4. ラマ教について

イ、宗派 ロ、ゴンバに関して

ハ、僧に関して

5. 言葉に関して

などを調査し、またそれらのラマ教との関係に主眼をおいて行った。またザンスカール内での重要な4つのゴンバ（寺院）に行き、その概要を調査して来たことは極めて意義があることだと考えられる。それら4つとは、バルシンが沢山あるズンクル、ザンスカール城中心部にあり、最大の祭を持つサニー（カニカゴンバ）、200人のラマ僧が住むカルシャ、最も遠いながら、その周辺では古い歴史を持つブクトルである。

特にズンクルゴンバに残るナロバ（西方より飛来したと言われる開祖）の伝説とサニーのカニカゴンバの建築物が四天王寺型であるという特異性と、カルシャ近くの尼寺（チョンモ）とブクトルの威容は特筆すべき点だと言えよう。

また生活に見られたチベット文化、とインド文化との差異と近似性は興味ある題材だった。そして今後最大の興味は冬期における人々の生活と次第に行われつつある文化変容に関してであろう。

一帰り道で思ったこと一

私達はたった一カ月の調査だったが、その間にしえたことは大きかったと感じている。しかし、それは長い歴史において培われてきた、ザンスカールの人々の文化のほんの一部分に触れただけであることも事実である。まだまだ未踏な点は多

く、それがどれほどあるかさえ分らないのが現実であろう。

それ故、夢は広がる。そして、その夢をなして、明らかならしめるのは今をおいてない。

ザンスカール計画は決して終わったのではなく、今、まさに始ったといえよう。

ベンジ・ラの峠を自動車道が越え、ダイナマイトの音を聞きながら、文明も共に時を越えて来る。そこで住む人々は来年、そして10年後はどのような生活をしているのかと考えながら、白雪なすヒマラヤに別れを告げた。

